

[A年] 降誕前第5主日(2020年11月22日)**【旧約聖書日課】 ミカ書2章12～13節**

- ¹² ヤコブよ、わたしはお前たちすべてを集め
イスラエルの残りの者を呼び寄せる。
わたしは彼らを羊のように囲いの中に
群れのように、牧場に導いてひとつにする。
彼らは人々と共にざわめく。
- ¹³ 打ち破る者が、彼らに先立って上ると
他の者も打ち破って、門を通り、外に出る。
彼らの王が彼らに先立って進み
主がその先頭に立たれる。

【使徒書日課】 ヨハネの黙示録19章11～16節

¹¹ そして、わたしは天が開かれているのを見
た。すると、見よ、白い馬が現れた。それ
に乗っている方は、「誠実」および「真実」
と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われ
る。¹² その目は燃え盛る炎のようで、頭には多
くの王冠があった。この方には、自分のほか
はだれも知らない名が記されていた。¹³ また、
血に染まった衣を身にまどっており、その名
は「神の言葉」と呼ばれた。¹⁴ そして、天の軍
勢が白い馬に乗り、白く清い麻の布をまどっ
てこの方に従っていた。¹⁵ この方の口からは、
鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒
すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治め
る。この方はぶどう酒の搾り桶を踏むが、こ
れには全能者である神の激しい怒りが込めら
れている。¹⁶ この方の衣と腿のあたりには、
「王の王、主の主」という名が記されていた。

【福音書日課】**マタイによる福音書25章31～46節**

³¹ 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従
えて来るとき、その栄光の座に着く。³² そして、
すべての国の民がその前に集められると、羊
飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより

分け、³³ 羊を右に、山羊を左に置く。³⁴ そこで、
王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わた
しの父に祝福された人たち、天地創造の時か
らお前たちのために用意されている国を受け
継ぎなさい。³⁵ お前たちは、わたしが飢えてい
たときに食べさせ、のどが渴いていたときに
飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、³⁶ 裸の
ときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいた
ときに訪ねてくれたからだ。』³⁷ すると、正し
い人たちが王に答える。『主よ、いつわたし
たちは、飢えておられるのを見て食べ物を差
し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み
物を差し上げたでしょうか。³⁸ いつ、旅をして
おられるのを見てお宿を貸し、裸でおられる
のを見てお着せしたでしょうか。³⁹ いつ、病気
をなさったり、牢におられたりするのを見て、
お訪ねしたでしょうか。』⁴⁰ そこで、王は答える。
『はっきり言うておく。わたしの兄弟で
あるこの最も小さい者の一人にしたのは、わ
たしにしてくれたことなのである。』

⁴¹ それから、王は左側にいる人たちにも言
う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、
悪魔とその手下のために用意してある永遠の
火に入れ。⁴² お前たちは、わたしが飢えてい
たときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ま
せず、⁴³ 旅をしていたときに宿を貸さず、裸の
ときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、
訪ねてくれなかったからだ。』⁴⁴ すると、彼ら
も答える。『主よ、いつわたしたちは、あな
たが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸で
あったり、病気であったり、牢におられたり
するのを見て、お世話をしなかったでしょ
うか。』⁴⁵ そこで、王は答える。『はっきり言っ
ておく。この最も小さい者の一人にしなかつ
たのは、わたしにしてくれなかったことなの
である。』⁴⁶ こうして、この者どもは永遠の罰
を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかる
のである。』

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ミカ書2章12～13節

12 ヤコブよ、私はあなたがたをことごとく集め
イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。

私は彼を囲いの中の羊のように
牧場の群れのように一つにする。
それは人の騒ぎとなる。

13 打ち破る者が彼らに先立って上り

彼らも打ち破って門を通り、外に出る。
彼らの王は彼らの前を進み
主はその先頭に立たれる。

ヨハネの黙示録19章11～16節

11 それから、私は天が開かれているのを見た。すると、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「忠実」および「真実」と呼ばれ、正義をもって裁き、また戦われる。12 その目は燃え盛る炎のようで、頭には多くの王冠を戴き、この方には、自分のほかは誰も知らない名が記されていた。13 この方は血染めの衣を身にまとい、その名は「神の言葉」と呼ばれた。14 そして、天の軍勢が白い馬に乗り、白く清い上質の亜麻布を身にまとい、この方に従っていた。15 この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治める。そして、この方はぶどう酒の搾り桶を踏む。そのぶどう酒には、全能者である神の怒りが込められている。16 この方の衣と腿には、「王の王、主の主」という名が記されていた。

マタイによる福音書25章31～46節

31 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、33 羊を右に、山羊を左に置く。34 そうし

て、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からあなたがたのために用意されている国を受け継ぎなさい。35 あなたがたは、私が飢えていたときに食べさせ、喉が渴いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、36 裸のときに着せ、病気のときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつ私たちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、喉が渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。38 いつ、見知らぬ方でおられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』40 そこで、王は答える。『よく言うておく。〔異本→私のきょうだいである〕この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。』

41 それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、私から離れ去り、悪魔とその使いたちに用意してある永遠の火に入れ。42 あなたがたは、私が飢えていたときに食べさせず、喉が渴いたときに飲ませず、43 よそ者であったときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、世話をしてくれなかったからだ。』44 すると、彼らも答える。『主よ、いつ私たちは、あなたが飢えたり、渴いたり、よそ者であったり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お仕えしなかったのでしょうか。』45 そこで、王は答える。『よく言うておく。この最も小さな者の一人にしなかったのは、すなわち、私にしなかったのである。』46 こうして、この人たちは永遠の懲らしめを受け、正しい人たちは永遠の命に入るであろう。』

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・11月22日「降誕前第5主日」の日課主題は「王の職務」。日本基督教団「新しい教会暦」で「待降節」直前の主日にあたり、伝統的な教会暦では「終末主日」、また近年は「王であるキリストの主日」と呼ばれている。教団主日聖書日課は、「新しい教会暦」の考え方に基づいて「降誕前」節に旧約の物語の主要なテーマを取り上げ、この主日には「ダビデ王」を想定しているが、同時に伝統的な教会暦の「王であるキリストの主日」に即した主題設定になるよう調整している。

・伝統的な「終末主日」は、「終末前々主日」からの三主日を通して、「聖書」の描く終末的出来事(多くは、黙示的表現で天変地異を伴う徹底的な破壊と天地の再生として描かれるもの)に即して、「キリストの再臨」を主眼とする「終末信仰」を主題として取り上げてきた。これは、基本的に過去から未来へ、創造から終末へという一直線的时间軸を基軸とした「救済史観」に基づいたもので、通俗的には、歴史の終わりにおける神的介入がすべてを解決するものとして想定されている。しかしながら、「聖書」で示される「終末」観は、必ずしも単純な「救済史観」に即しているわけではない。たとえば、主イエスの宣教の言葉に現れる「神の国」は、あきらかに終末的な「神の支配」を意味する用語であるが、主イエスはそれがすでに近づいているとすることで「終末の現在化」を説いた。これを、初代教会の弟子たちは、当初、「終末がすぐに訪れること」と理解したと考えられるが、徐々に考えをあらため、「当分訪れることがなさそうな終末を見据えながら、すでに終末のときが来たように生きること」と理解するように変化している。また、そもそも旧約の原語であるヘブライ語(セム語)には、印欧語に見られるような明確な時制表現が無いことが知られており、旧約思想の中でギリシア的な時間論に基づいた救済史観がどれだけ妥当なのか、という指摘もある。

旧約日課(ミカ2章より)

・「ミカ書」は、「十二小預言書」の中に含まれる預言書の一つで、標題(1:1)によれば、預言者イザヤとほぼ同時代に活動をした預言者ミカの預言をまとめたものである。イザヤやミカの時代は、紀元前8世紀後半、北王国ではヤロブアム王、南王国ではウジヤ王の治世下で見られた両王国の隆盛が、アッシリア帝国の侵略により一気に崩れ、北王国が滅亡、南王国もアッシリアに服従することでろうじて王国を維持し続ける道を得るという、激動の時代である。イザヤやミカの預言活動は、同時代に北王国で活動したと考えられるアモスやホセアら預言者の伝統を吸収しながら、預言者集団によって継承されていったと考えられ、「イザヤ書」同様に「ミカ書」も、後半(4章以下)は、ミカ自身ではなく活動を継承した預言者集団によって語られた預言であると、聖書学者らは考えている。

・日課箇所は、離散した「ヤコブの家＝イスラエル」が再結集されるという預言が告げられている。学者によっては、これを「民を惑わす預言者たち」(3:5)の「偽預言」ではないかと解釈する場合もあるが、「ミカ書」後半で告げられていく救済預言と基本的に一致しており、また「イザヤ書」にも類似の預言があることから、あえて「偽預言」と解釈する必要はないだろう。

・神に対する罪過のために離散した「民」が再建されることを、「主なる神」が「王」としての支配を始められることとして描くのは、「イザヤ書」でも典型的である。「イスラエル」および「ユダ」の王権は歴史的に、軍事的な力に基づいた世俗勢力が優勢であったと考えられるが、祭儀的な権威に基づいた祭司勢力も一定の影響力を行使していた。ソロモン王の時代には王が祭司的権威を自ら帯びることで一種の神権政治が目指されていたと考えられるが、南北王国分裂後は、両勢力が拮抗し相互補完的に王権を成立させるようになっていったのだろう。王国滅亡という事態に直面したとき、預言者らは、世俗勢力による神的権威の軽視にその根本原因を見て取り、世俗勢力に対する神的権威の優位こそが王国再建の必須条件であると考えたであろう。その究極的結論は、神ご自身が王として世俗勢力に代わって支配権を行使する「神聖政治」であったと考えられる。

使徒書日課(黙示録19章より)

・「ヨハネの黙示録」は、「新約」の最後に置かれた文書で、元来、形式的には「使徒書」に類比した書簡として整えられ、回覧されたものである。標題(1:1)に用いられている「黙示」の語は「アポカリュプシス」で、他の新約文書では「啓示」等と訳されている。本書は、著者「ヨハネ」(1:2)が「主の日」の礼拝の中で幻として示された「イエス・キリストの啓示」を「アジア州にある七つの教会」に宛てて書き送るという構成になっており、4章以下は、ヨハネが天上に引き上げられて見せられた幻の描写となっている。幻はもっぱら超自然的な隠喩表現での描写となっているが、これは、旧約の黙示文学的文書(「エゼキエル書」、「ダニエル書」、「ゼカリヤ書」など)を下敷きにしたことによるもので、おそらく政治的な摘発を避けるための手法であったと考えられる。

・日課箇所は、本書の終幕として置かれたまとめ(19～22章)の一部で、キリストの来臨を「白馬の騎手」の登場として描写しているものと考えられる。その属性として、「誠実(ピストス)」、「真実(アレーティノス)」、「正義(ディカイオシュネー)」、さらに「神の言葉」といった象徴的な神学用語が並べられている。同時に、「王冠」、「鋭い剣」、「鉄の杖」など世俗的王権を示す用語が並べられている。これらを統合する表現として、「王の王、主の主」が示されているのであろう。通俗的には、この「白馬の騎手」の姿が「再臨のキリスト」像として図像化されて描かれてきた。

福音書日課(マタイ 25 章より)

・日課箇所は、「マタイ福音書」中に置かれた終末に関する主イエスの教えの一部で、「マルコ福音書」や「ルカ福音書」に共通する「小黙示録」と呼ばれる内容(24 章)に続いて置かれた比喩的教えの最後である。日課箇所に先行する比喩的教え(「忠実な僕のたとえ」、「十人のおとめのたとえ」、「タラントンのたとえ」)はいずれも、不在であった主人の到着によって慌てふためく者らと冷静に対応する者らの対比が描かれ、主人の到着に備えてふさわしい準備をすべきことが教えられている。それを受けて、日課箇所では、「終末の裁き」というすでにユダヤ人(特にファリサイ派系の「終末の復活」信仰を共有していた人々)の間で良く知られていたイメージを用いて、神の「裁き」に耐えうる行動の規範が何であるかが示されている。これらの行動規範は、18~19 章で集中して教えられている事柄と重なり合うものである。

・ここでは、「人の子」と呼ばれる者が「王」として裁きを行っている。「マタイ福音書」で「王」を直接的に使用した比喩は、「仲間を赦さない家来のたとえ」(18:19~35)と「婚宴のたとえ」(22:1~14)がある。いずれも、王から受けた行為に対していかに応ずるべきかが主題となっており、日課箇所の根底には、そこに示された規範となる行為を「人の子」自身が彼らに対してしてくださっていたのだという理解があると考えられることができる。

来週の誕生日 (11 月 22 日~28 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-351 番「聖なる聖なる」(=□12 番、I66 番)は、19 世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍した R・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために 19 世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭 J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA (ニケア)」の曲名が付されている。
- ・21-386 番「人は畑をよく耕し」(= I 422 番)は、18-19 世紀ドイツの文筆家マティアス・クラウディウスの長編詩「パウロ・エルトマンの祝祭」の一部で、こどものための唱歌集に収録されて歌われるようになった。216 番「月はのぼりて」も同氏の作詞。曲は、216 番と同じハーゲン宮廷楽長として知られるヨハン・A.P. シュルツの作曲とされるが詳細は不詳。
- ・21-510 番「主よ、終わりまで」(= I 338)は、19 世紀英国教会の司祭ボードがこどもたちの堅信礼のために作詞したもので、1954 年版からは改訳されている。曲は、19 世紀英国教会のオルガニスト・アーサー・マンの作曲。現代の英米圏諸教派でもっとも広く採用され続けている讃美歌の一つ。

21-351「聖なる聖なる」

Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / Early in the morning our song shall rise to thee. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee, / casting down their golden crowns around the glassy sea; / cherubim and seraphim falling down before thee, / which wert, and art, and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee, / though the eye of sinful man thy glory may not see, / only thou art holy; there is none beside thee, / perfect in power, in love and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / All thy works shall praise thy name, in earth and sky and sea. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity.

21-386「人は畑をよく耕し」

Wir pflügen und wir streuen (Alle gute Gabe)

1. Wir pflügen, und wir streuen / den Samen auf das Land, / doch Wachstum und Gedeihen / steht in des Himmels Hand: / der tut mit leisem When / sich mild und heimlich auf / und träufft, wenn heim wir gehen, / Wuchs und Gedeihen drauf.
- Refr.: 1.-4.
Alle gute Gabe kommt her von Gott dem Herrn, / drum dankt ihm, dankt, drum dankt ihm, dankt / und hofft auf ihn!
2. Er sendet Tau und Regen / und Sonn- und Mondenschein, / er wickelt seinen Segen / gar zart und künstlich ein / und bringt ihn dann behende / in unser Feld und Brot: / es geht durch unsre Hände, / kommt aber her von Gott.
 3. Was nah ist und was ferne, / von Gott kommt alles her, / der Strohalm und die Sterne, / der Sperling und das Meer. / Von ihm sind Büsch und Blätter / und Korn und Obst von ihm, / das schöne Frühlingswetter / und Schnee und Ungestüm.
 4. Er läßt die Sonn aufgehen, / er stellt des Mondes Lauf; / er läßt die Winde when / und tut den Himmel auf. / Er schenkt uns so viel Freude, / er macht uns frisch und rot; er gibt den Kühen Weide / und unsern Kindern Brot.

21-510「主よ、終わりまで」

O Jesus, I have promised

1. O Jesus, I have promised / to serve thee to the end; be thou forever near me, / my Master and my friend. / I shall not fear the battle / if thou art by my side, / nor wander from the pathway / if thou wilt be my guide.
2. O let me feel thee near me! / The world is ever near; / I see the sights that dazzle, / the tempting sounds I hear; / my foes are ever near me, / around me and within; / but Jesus, draw thou nearer, / and shield my soul from sin.
3. O let me hear thee speaking / in accents clear and still, / above the storms of passion, / the murmurs of self-will. / O speak to reassure me, / to hasten or control; / O speak, and make me listen, / thou guardian of my soul.
4. O Jesus, thou hast promised / to all who follow thee / that where thou art in glory / there shall thy servant be. / And Jesus, I have promised / to serve thee to the end; / O give me grace to follow, / my Master and my Friend.